まちなかプラン　敷地の方針

これまでの蓄積を活かす意義

災害を経て、これまで当たり前のように小高にあった風景が、激変の境地にあります。四年半住めなかったことで壊さざるを得ないものもあります。今だからこそ、これまでの蓄積を活かすことを意識した復興が必要です。それには、二つの意義があります。

① 合理性がある

小高のまちには、下図ような典型的な敷地の特徴があります。間口が約七mで奥ゆきのある短冊型の敷地です。この形態は、長年、小高の慣習を支えてきました。そのときの社会状況にうまく応じながら変えるところは変え、継承すべきところは継承してきた姿が今の姿です。それを無視して新たな開発をするのではなく、蓄積を活かすことが、小高の人にとってはずっと馴染みやすく、使いやすいものとなるでしょう。

② 人と、小高をつなぐ

長期的にみて、小高を一旦離れた人たちが帰ってきたり、お盆など定期的に通ったりすることを考えた時に、「小高に帰ってきた」と思える場所を一つでも多く残していくことは、もう一度「選ばれるまち」になるための必要条件となります。被災前後をつなぐものとしての役割を果たします。

このような志のもと、次ページでは、地として継承すべき方針の四点を取り上げています。

さらに、以降のページにおいても、この考え方が根底にあります。

▼ p18-19
「活動を生み出す空間づくり」

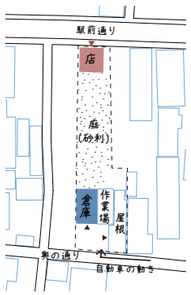
空地や空き家に手入れをすることで、多様な活動を生み出す場となります。

▼ p20-21
「歴史を伝える建物の継承」

歴史を伝える建物を活用することで、小高らしい風景を維持していくことができます。

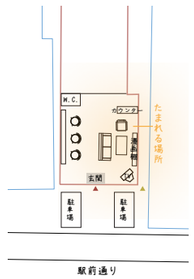
典型的な敷地の特徴

■ よ志み屋米穀店

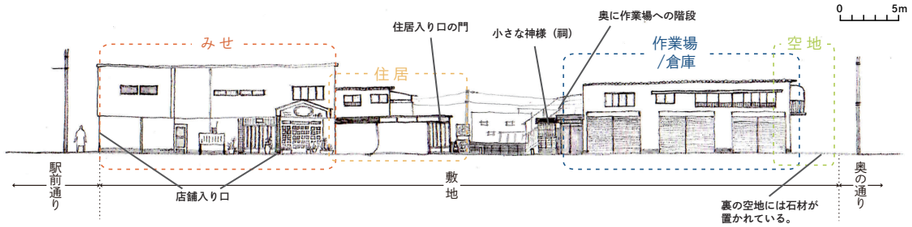


駅前通り側が商店、奥の通り側が作業場の典型例です。敷地の内部には庭があり、通りから庭の緑が垣間見えます。

■ 理容カトウ

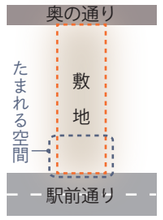


老若男女、幅広く親しまれています。散髪の用がなくてもおしゃべりをしにふらっと立ち寄る人も多いそうです。



▲ 塩屋金物店の立面図　：駅前通り側からみせ、住居、作業場となっています。
隣の敷地は市有地で駐車場としても使われています。

敷地が二つの道路に面する

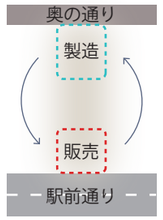


細長い敷地が、分割されることなく二つの道路に面していることで、空間の使われ方も豊かになります。

例えば、駅前通りに多くみられる、被災前から来訪者をもてなしてきた「たまれる場所」が被災後の活用にもつながっています。

▲ 理容室カトウの
たまれる場所

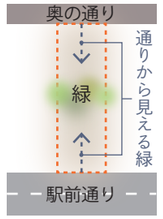
二次産業と三次産業が同じ敷地に共存する



まちなかには第二次産業（製造）と第三次産業（販売）を組み合わせて行う店が多くあります。奥の方に作業場があり、原材料の搬入車は奥の通りから入ります。作業場で生産したものを敷地内の通路で運び、表の商店で販売します。

▲ よ志みやの作業場

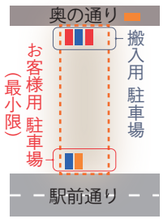
通りから庭の緑が垣間見える



敷地の中程には、手入れのされた庭の緑が垣間見えます。住空間が豊かであった様子が想像できます。

▲ 塀越しに見える庭の緑

駅前通りの駐車場は必要最小限にする



駅前通りに入ってくる車をコントロールすることで、人が歩きやすい空間をつくり出します。奥の通り側は、作業や搬入など日常的に車を利用することが多いと考えられるので、使いやすさを保ちます。

▲ 駅前通りに育つ花々